

# 「日本仏教」のはじまり—古代中世の認識をめぐって—

早稲田大学文学学術院 吉原 浩人

日本に、仏教はいつ伝来し、どのように受容され広まったのであろうか。いわゆる仏教公伝は、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』『上宮聖徳法王帝説』にみる、538年（「欽明天皇戊午年」＝宣化天皇3年？）説と、『日本書紀』に拠る552年（欽明天皇13年）説の、二つがあることは周知のことであろう。

本発表で問題にしたいのは、これら奈良時代から平安初期にかけて成立した典籍に見られる、いわゆる歴史的事実を追究することではなく、古代・中世の日本人が「日本仏教」のはじまりを、どのように認識していたか、その本質や変遷を探ることである。

『日本書紀』は、平安中期以降、ごく限られた官人しか見ることができなくなったため、日本の正史としての位置を失い、仏教伝来についてさまざまな説が並び立つことになった。また仏教が、いつどこに伝来したかも重要ではあるが、誰がどのように日本仏教の礎を築き発展させたかについての言説も重視された。そのような中で、日本仏教の創始者としての聖徳太子に対する信仰が奈良時代から広まっていく。さらに、天竺における阿弥陀如来像の出現と日本仏教の始まりを説く『善光寺縁起』が、平安後期には成立していた。両者は個別にも語られたが、一体化してさまざまな言説が派生することになる。

本発表では、仏教の伝来について、まず中国においてどのように捉えられていたかについて概観し、続いて高句麗・百済・新羅の朝鮮半島三国における仏教受容の諸相についてもみていく。そのうえで、上記古代史書などにおける認識や、『日本霊異記』『三宝絵』『今昔物語集』『扶桑略記』などにみる平安時代の三国歴史観、大陸との交流が深まった時代における『愚管抄』『元亨釈書』『神皇正統記』『善隣国宝記』や各種「年代記」などにおけるナショナリズム、あるいは最澄や親鸞など祖師における仏教史や日本仏教に対する認識について、一々の史資料を提示しながら、考察していきたい。さらに、中国・朝鮮における、仏教側の道教に対する認識を確認しながら、日本における「神」の認識や習合思想の展開についても闡明していく。

自らが属する集団の始原を知りたいと探ることは、人間の本能ともいえよう。仏教は釈尊の説いた教えであることは、あまりに自明であるため、それが日本にどのように伝わり、どのように展開していったかについては、近代の仏教学・仏教史学ではあまり関心が持たれていなかったようである。したがって、個別の文献についての研究は多いのだが、それらを俯瞰する試みが少ないように思われる。発表者は、善光寺信仰・聖徳太子信仰・習合思想の研究を長年行ってきており、それらの知見を生かしつつ、従来とは視点の異なる、「日本仏教」のはじまりについて論じていきたい。

《キーワード》 仏教伝来、聖徳太子信仰、善光寺信仰、歴史観